

「神経心理学」誌第 100 号刊行を迎えて

濱中 淑彦

日本神経心理学会第 2 代編集委員会委員長, 第 4 代理事長

我々の学会誌「神経心理学」が本号をもって第 100 号に達したことになるという。学会創立 30 周年が 2008 年に記念されて間もないことでもあり、ご同慶のいたりである。周知の通り、本誌が創刊されたのは 1985 年 5 月だから、今年は創刊後 26 年、四半世紀余りを経たことになる。当時の理事長を勤められた故大橋博司先生(第 4 回会長: 京都, 1980)が初代編集委員長を兼任されて寄せられた「創刊の辞」にある通り、学会自体は「神経心理懇話会」として既に 1978 年に発足し、第 1 回学術研究会(東京)が故豊倉康夫会長(後に第二代理事長)のお世話で開催され、鳥居方策先生(第 2 回会長: 金沢)が事務局運営の労をお引き受け下さったのであるから、創刊は学会発足後 7 年目のことであった。その間、1982 年には学会自体は現在の正式名称「神経心理学会」となったのだが、本誌創刊以前の主たる学会記録は「精神医学」などの他誌に掲載されていたので必ずしも全会員が容易に閲覧できる訳ではなかった。創刊号には早速、前年(1984)の第 8 回学会報告(山口成良会長: 金沢)と一般演題抄録が掲載されたが、巻頭を飾ったのは、本邦神経心理学の先駆者の一人として最初の「失行症」論(1935: 1976 復刻)を第二次世界大戦前に発表されていた故秋元波留夫先生(名誉会員)の特別講演「失行研究と Hugo Liepmann」(1984 年学会)であった。学会誌は最初年 2 回の刊行だったが、その後は現行通り年 4 回の季刊となり、毎巻読み応えのある内容であった。筆者は編集委員長(1987-1996)、次いで理事長(1996-1999: 鳥居方策第三代理事長の後)を拝命してお手伝いをさせていただく機会があったが、今から顧みると、果たしてどれほどお役に立つことができたか、忸怩たる思いである。むしろ編集などの仕事を通じて、示唆に富む数多くの投稿論文に接することにより、個人的な専門領域以外のテーマを含めて神経心理学の現況全般について勉強させていただく刻をもつことができたのは何とも有り難いことであった。最近、創刊当初の各号を取り出して今一度繙いていると、当時から力作論文が少なくなく、当然のことながら中には本年度の掲載論文にお引用されている論文があることを見いだして、大いに心強く思った次第である。一例のみ挙げるなら、創刊年第 2 号(pp. 82~92, 1985)において「日本語版 Mini-Mental State テスト」を発表した原著が、本年第 2 号(pp. 160~165, 2011)の論文「もの忘れ外来のための日常記憶課題の検討」に引用されている。としてみれば、現在の学会ホームページから閲覧できる学会誌掲載論文が 2000 年以降のものに限定されており、それ以前 15 年間(1985~1999)の掲載内容を読むことができないのは、いささかならず残念である。若返りつつある全会員の学術活動に資するためにも、予算が許すようなら是非とも創刊以来の全号を閲覧可能にさせていただくことはできないものであろうか、本学会の歴史に触れる機縁にもなろうと思うので、一老会員としてお願いすることをお許しいただきたい。今後も斬新な視点に立つ原著論文が次々に投稿・掲載されることを祈念し、「神経心理学」第 101 号以降の発展を心より期待する昨今である。(了)